

時宜を得て政治的・社会的に正しくある

旧体制末期フランスのフリーメイソン・国家・身分制社会

ピエール＝イヴ・ボルペール
田瀬 望 訳*

フリーメイソン研究が積み重ねてきた遅れは甚大である¹。メイソン研究は社会文化史研究の大きな方向転換を経験することなく、次第に孤立した。フリーメイソン団の歴史家の多くは、いまだに団体の起源についての虚しい探究に拘泥しており、やっとのことで創立伝説を放棄した——だからといって、彼らは人類学者と同じ仕方でも創立伝説を神話的構築物として研究しようとはしないのだが。シャルル・ボルセの表現を借りるならば、彼らは「信者」として行動しており、それゆえに彼らの研究対象の学術的価値を毀損しているのである。このように言えば、故ピエール・シュヴァリエが、大学の規範に合致する学術的なフランス・フリーメイソン史の出現に大きく貢献したのではないかと反論されるだろう。もちろん、シュヴァリエの功績に異論の余地はない。とはいえ、彼の仕事がメイソンの社交・感性の歴史よりもフランスの統轄団体の運営史とパリ史を重要視していたことは認めざるをえない²。シュヴァリエは社会文化史が確立し旧体制社会へのアプローチを刷新した時代——1960・70年代——にあっても実証主義史学に忠実であり、フランスにおけるメイソン団の最初の世紀に

* フリーメイソン関連用語の訳については、ピエール＝イヴ・ボルペール『『啓蒙の世紀』のフリーメイソン』（深沢克己編訳、山川出版社、2009年）巻末の用語集に準じる。訳者が原文にない説明を補足する場合、本文内で亀甲括弧を用いるほか、末尾に若干の訳注を付している。

¹ シャルル・ボルセによる豊かで優れた研究史の解説を参照せよ。Charles Porset, «La Franc-maçonnerie française au dix-huitième siècle. État de la recherche. Position des questions (1970-1992)», dans J. A. Ferrer Benimeli (dir.), *La Masoneria Española entre Europa y America*, II, VI Symposium Internacional de Historia de la Masoneria Española, Zaragoza 1-3 de julio 1993, Zaragoza, Gobierno de Aragon, Departamento de Educacion y Cultura, 1995, p. 903-995. 同様に著者の遺作も参照。Id., *Hiram Sans-Culotte? Franc-maçonnerie, Lumières et Révolution. Trente ans d'études et de recherches*, Paris, Honoré Champion, 1998.

関して史料に裏づけられた詳細な年代記を作成した。旧体制期フランス社会文化史におけるメイソン現象の豊かさを示し、啓蒙期の社交空間におけるメイソン・ネットワークの重要性を強調した研究は、多くの場合、メイソン研究界隈の外にいる研究者たちの著作である³。それゆえに彼らの仕事は「メイソン学者」*maçonnologue*——まさにこのおぞましい言葉がメイソン史研究者を不毛な独白のなかに閉じ込めている——のコミュニティでは、メイソンの社交とその争点に関する認識を顕著に修正することはなかった。彼らの仕事が最も読者を得たのは、俗人〔非メイソン〕研究の領域においてである。確かに「ソシアビリテ」という語の使用はメイソン研究の内部に広まったものの、この観念の問題発見的な価値とその論点に関する省察が、本当の意味でなされることはなかった。ラン・アレヴィによる試論は、豊かで実りある議論を喚起しえただろうに孤立したままである⁴。唯一批判したのはジェラルド・ガヨだが、彼の先駆的業績はメイソン団公式の歴史においては認められていない⁵。さらに、メイソンの社会学的分析は会員の人名リストを作成し、しばしば静態的な仕方では社会的に

² Pierre Chevallier, *La première profanation du temple maçonnique ou Louis XV et la fraternité 1737-1755*, Paris, Librairie philosophique Vrin, 1968; Id., *Les ducs sous l'Acacia ou Les premiers pas de la Franc-maçonnerie française 1725-1743*, Paris, Librairie philosophique Vrin, 1964; Id., *Les ducs sous l'Acacia ou Les premiers pas de la Franc-maçonnerie française 1725-1743. Nouvelles recherches sur les francs-maçons parisiens et lorrains 1709-1785. Les idées religieuses de Davy de La Fautrière*, Paris-Genève, H. Champion Slatkine, 1995.

³ Daniel Roche, *Le siècle des Lumières en province. Académies et académiciens provinciaux, 1680-1789*, Paris-La Haye, Mouton, 1973, 2^e éd. de l'EHESS, 1984, 2 vol; Id., *Les Républicains des Lettres. Gens de culture et Lumières au XVIII^e siècle*, Paris, Fayard, 1988. Maurice Agulhon, *Pénitents et Francs-Maçons de l'ancienne Provence. Essai sur la sociabilité méridionale*, Paris, Fayard, 1968, 2^e éd., 1984.

⁴ Ran Halévi, *Les loges maçonniques dans la France d'Ancien Régime. Aux origines de la sociabilité démocratique*, Paris, Armand Colin, 1984.

⁵ Gérard Gayot, « Les problèmes de la double appartenance: protestants et francs-maçons à Sedan au XVIII^e siècle », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, t. XVIII, n° 3, 1971, p. 415-429; Id., *La Franc-maçonnerie française, textes et pratiques (XVII^e-XIX^e siècles)*, Paris, Gallimard, 1980, éd. 1991; Id., « War die französische Freimaurerei des 18. Jahrhunderts eine Schule der Gleichheit ? », Hans Erich Bödeker, Etienne François (éd.), *Aufklärung/Lumières und Politik. Zur politischen Kultur der deutschen und französischen Aufklärung, Deutsch-Französische Kulturbibliothek, Band 5, Transfer*, Leipzig, Leipziger Universitätsverlag, 1996, p. 235-248.

位にしたがって、すなわち、一定数の社会職業集団に応じて分類するにとどまっている。メイソンの集合的人物誌研究はほとんどなされておらず、唯一それに着手したのは、ここでもまた社会文化史研究者たちである。彼らは調査を通じてメイソン団への所属が頻繁であり、アウトサイダーの社会的上昇やインサイダーによる社会的卓越の表明の戦略全体において重要だったと明らかにした。文学史や社会的・文化的実践の歴史といった近接領域では動きが増えているのだが⁶、メイソン・ネットワークの地図作成、職業・家族・宗派・庇護・友情のネットワークとの相互連結の解明は概してまだ着手されていない。とはいえ、展望はある。ミシェル・タイユフェールからエリック・ソニエまで、数多くの地域研究が今日、パリに偏った視座から脱却しつつ、メイソン現象への新しいアプローチを可能にしている⁷。シャルル・ポルセの仕事は、啓蒙の世紀という理性と非合理が時代を賭して競い合った時代のメイソン団に関する私たちの知識を大きく刷新した⁸。メイソン団がコスモポリタンの信仰告白をしていたにもかかわらず、期待に反して、最近までフリーメイソン世界共和国〔コスモポリタニズム〕に関する研究はなされてこなかった。だが、私はこうした調査に取り組む意義を示そうと試みた⁹。今日、私たちに求められているのは、メイソン研究をその孤立から脱却させようと常に配慮しつつ、メイソンの表象と感性について調査し、メイソンのアイデンティティの輪郭を描き出し、メイソン空間を把握することである。メイソン空間は会所の会堂という禁域、都市、地方、

⁶ ユグノと哲学者の書簡を電子出版し、古典主義時代のコミュニケーション地図を作成するために現在、立ち上げられているヨーロッパの研究者ネットワークに私が参加した理由である。

⁷ Michel Taillefer, *La Franc-maçonnerie toulousaine sous l'Ancien Régime et la Révolution 1741-1799*, Paris, CTHS, 1984. Éric Saunier, *Révolution et sociabilité en Normandie au tournant des dix-huitième et dix-neuvième siècles: 6000 francs-maçons de 1740 à 1830*, Rouen, Presses Universitaires de Rouen-Le Havre, 1998.

⁸ Louis Amiable, *Une loge maçonnique d'avant 1789, la loge des Neuf Sœurs, augmenté d'un commentaire et de notes critiques de Charles Porset*, Paris, EDIMAF, 1989. Charles Porset, *Les Philalèthes et les Convents de Paris, Une politique de la folie*, Paris, Honoré Champion, 1996.

⁹ Pierre-Yves Beaurepaire, *Franc-maçonnerie et cosmopolitisme au siècle des Lumières*, Paris, EDIMAF, 1998; Id., *L'Autre et le Frère. L'Étranger et la Franc-maçonnerie en France au XVIII^e siècle*, Paris, Honoré Champion, 1998; Id., *La République universelle des francs-maçons. De Newton à Metternich*, Rennes, Ouest-France, 1999.

領域国家の境界のうちで展開するとともに、それを超えてカロリング朝の版図やテンプル騎士団の管区を甦らせながらヨーロッパ全域へと拡大し、会堂の境界をオイクメーネー〔人間の居住する世界〕までおし広げるのである。

私はまさにこうした全体的展望をもちながら、この論文において開封王書により公認された正統な社交空間の周縁にある組織としてのフリーメイソン団の諸矛盾——したがって、その豊かさ——に関する考察を提示したい。メイソン団は、自らが俗人界の編成原理と根本的に対立すると断言していたが、だからといって国家による「公的有用性」および「より多数でより賢明な側」^{〔訳注(1)〕}による卓越化の公的承認の獲得を断念したわけではなかった。兄弟として互いに承認し合う同輩から構成される結社は、選ばれし友の会堂に「より多数でより賢明な側」が存在するか否かによって、正統文化の規範に照らして〔公的承認の〕資格を与えられたり剥奪されたりするものである。実際、私はこうした矛盾を検討することで旧体制期の社交界に独自の視角から接近し、そこで生じる緊張、そこに組み込まれた軌跡を解明できると考えている。ここからヤコブ・カツツにより提案・議論された「中立結社」¹⁰という観念の問題発見的な側面について考察し、ラン・アレヴィが支持した「民主的社交組織の起源」としてのメイソンの社交という見解を史料にもとづいて再検討したうえで、私の考察から得られた成果を、「主権のない市民権」としての啓蒙期の社交に関するアメリカ人歴史家ダニエル・ゴードンによる最近の仕事と突き合わせたい¹¹。

開封王書をもとめて

フリーメイソン団が国家とその代理人と取り結んだ諸関係を研究することで、メイソンが相互に矛盾しつつも補完し合う二つの願望を育んでいたことが明らかになる。メイソンは俗人界の編成原理と自らを根本的に区別することで、メイソン界の自律性を創り出した。同時に、彼らはイングランド、フランス、スカンディナヴィア、さらにはプロイセンにおいても模範的な臣民・市民であら

¹⁰ Jacob Katz, *Juifs et francs-maçons en Europe 1723-1939*, (trad. franç. de *Jews and Freemasons in Europe 1723-1939*, Cambridge [Mass.], Harvard UP, 1970), Paris, Cerf, 1995.

¹¹ Daniel Gordon, *Citizens without sovereignty. Equality and sociability in French thought, 1670-1789*, Princeton, Princeton UP, 1994.

んと欲し、公的承認を夢見ることを決してやめなかった。彼らは、自らの団体が開封王書により承認された社交空間〔社团〕の周縁に位置することを認識していたし、団体存続への関心からも団体を制度化するための行動を繰り返した。権力の側は、開封王書により承認された社交空間の周縁に会所を維持することに数多くの利点があると完全に理解していた。公的承認の見通しは、絶えず延期されていたものの決して諦められることはなく、体制内で高位を占める人物、さらに王族、続いて皇族の構成員の加入がこうした制度化に向けた第一歩となりうるものであっただけに、兄弟たちに忠実さと忠誠の身振りを繰り返すように促したのである。他方で、会所は公的承認の見通しから、きわめて有効な自己検閲と自己統制へと促され、諸権威からのあらゆる懸念を予防するよう仕向けられた。この点については、少なくとも復古王政期まで連続性が見られた。それゆえ、メイソン団は「中立結社」というよりは、中立化された結社ではないかという問いを提起できるのである。

メイソン団の制度化の前段階をなす王の庇護が、1723年と1738年の『フリーメイソン憲章』のなかで求められていたのは明らかである。まず、長老派牧師ジェイムズ・アンダーソンは、18世紀に作業する全メイソンの庇護者たる「宇宙の偉大なる建築師である神に似せて創造された、我々の始祖」としてアダムを提示した¹²。アダムを最初のメイソンと見なすことは、時代背景を踏まえるならば、独自でもなければ、驚くべきことでもない。というのも君主制が合理的であると同時に神に認められた唯一の体制であると正当化するために、アダムを最初の王とすることは慣例化していたのである。続いて、アンダーソンは、偉大な建築師と、メイソンを庇護し大会所長になった君主、すなわち、メイソン団の庇護者の長大な名簿を作成した。これにより彼は「王の技法（諸王の技法であり、諸技芸の王である）」の先駆者の長大で威信ある系譜を作り上げた。アンダーソンは「イェルサレムの会所の大会所長」ソロモンに大きな関心を寄せた。ソロモンの神殿建設がメイソン団の代表的な創立神話であるのは事実で

¹² Georges Lamoine (éd. et trad.), *Les Constitutions d'Anderson. Traductions sur les textes de 1723 et 1738*, Toulouse, SNES, 1995, p. 36. 『フリーメイソン憲章』1738年版は、アダムへの言及を放棄することはなかったものの、それ以上にノアとその子らの役割を強調している。「自由受容メイソンの義務」の第1条もフリーメイソンが「皆、ノアの三大戒律は会所の絆を保持するのに十分であると認めている」と強調した。 *Ibid.*, p. 214.

ある。アンダーソンはピタゴラスを系譜に組み込んだのち、「傑出した幾何学者アルキメデスが活躍したシチリアの学者島」を書き落とさず、「大ウィトルウィウス」をこの時代までのすべての真なる建築師の父であると見なした。だが、アンダーソンは君主たちが引き受けた正真正銘のフリーメイソン団の庇護者の役割を忘れることはなかった。

ゆえに、栄光あるアウグストゥスはローマの会所の大会所長になったと当然認められる。彼はウィトルウィウスの庇護者であっただけでなく、職人の境遇をおおいに改善した。このことは、彼の治世を特徴づける数多くの壮麗な建築物から明らかであり、その遺構は正真正銘のメイソン団の模範と基準となっている¹³。

ここには規範的モデルという考えがすでに存在しており、今日も依然としてメイソン団の国際関係をかき乱す争点である正規メイソン制の定義、そして当然、非正規メイソン制のそれを予示している。

アンダーソンの物語のこの点について、彼の企図を異常なものだと貶め、古代以降のすべての有名な建築物とその建設に従事した君主、それらを完成させた建築士や幾何学者を愚かにもごちゃ混ぜにしたものとしか見なさないのは不当であろう。初期のロンドン大会所は、アダムを最初の王と見なすのが普通だったアンダーソンの時代に威信ある象徴資本を創出し、自らを卓越した伝統に組み込もうとしていた。特にロンドン大会所は、伝統社会のあらゆる新しい結社と同じように、権勢ある庇護者、保護、公的承認といった存続・繁栄・生存の保障を求めていた。というのも、政治権力は開封王書により承認されていない社交組織の出現に自然と不安を感じるからである。

したがって、メイソンたちは、歴史上の最も偉大な君主がメイソン団を支援し、王の技法の作業に参加していたと示すことで、現在の君主もメイソン団を好意的なまなざしで眺め、王の庇護を与えることを承諾するのではないかと正当に期待できたのである。こうした要求は、『フリーメイソン憲章』1738年版の献辞以降、ロンドンで1714年から統治していたハノーファー朝に明らかに向け

¹³ Lamoine, *op. cit.*, p. 48-49.

られている。

ご威勢高き陛下へ

我々のいとも尊敬すべき大会所長カーナヴォン侯、その代理と監督たち、そして友愛団は、その名においてこの憲章を国王陛下に謹献するよう著者の私に命じました。[…]

国王陛下は我々の友愛団が過去にしばしば王家の人物の庇護を享受していたことをよくご存知です。そして、フリーメイソンたちはその忠誠によってこうした庇護に値するよう常に努めてきました。

その証拠に、我々の会所では国事を論じることは決してなく、世俗の司法官に疑念を抱かせうること、我々固有の交流の調和を乱し、会所の接合を弱めることは何であれ、論じることはありません。

他の事柄について各々の意見がいかなるものであれ（各人の良心の自由に委ねつつ）、我々はメイソンとして、この高貴な科学、王の技法と社会的美德において調和的に協働します。ちょうど我々が、現在、我々の父にして主君であらせられる王ジョージ2世のもと、この〔ブリテン〕諸島で幸福に集会をしているように、我々は誠実で忠実であると示し、地上の諸君主に背くようなことは避け、そのもとで荘厳な仕方では平和に集会しています。

友愛団全体は、あなた方王家の人物がメイソンの兄弟・庇護者となることで友愛団にもたらされた非常に大きな名誉にしっかりと満たされており、彼らの感謝、友愛の情、王妃への義務をあなた方に示すように私に命じ、王妃が多くの子に恵まれた幸福な母となられ、その子孫もまた来るべき数世紀にわたって友愛団の庇護者となられることを願っております。

ご威勢高き陛下、自由受容メイソンたちは以上の点について全員一致しております。

誰よりも心より謹んで忠実で誠実なジェイムズ・アンダーソン¹⁴

公的承認の保証として大会所に庇護を与えるようハノーファー出身のドイツ系王家を説得するためには、ブリテン諸島のメイソン団の導入・普及・保護にお

¹⁴ Lamoine, *op. cit.*, p. 96-97.

ける歴代のイングランド王の役割について当然言及しなくてはならなかった。これは、1715年にボリングブルックが投げつけた意地悪いレッテルを借用するならば、「ドイツ人旅行者」にその名を君主政とイングランドの長き伝統に簡単に登場させられるのだと理解させるための方策であった。アンダーソンはこの点を極めてよく理解していた。彼はまた中世にイングランド諸王が作業メイソン団〔石工の職能集団〕の厳格で調和のとれた組織化に決定的な介入をしていたと強調することで、過去の君主のもとで作業メイソンが享受していたのと同じ支援と庇護を現在の君主に要求すると同時に、思弁メイソン団〔18世紀の非職能的友愛団〕と作業メイソン団の断絶という考えを否定し、両者の直接的系譜関係を創出できることも理解していたのである。

アンダーソンは1738年版でハノーファー家を「グレート・ブリテンのサクソン人王」と形容したのと同じように¹⁵、「サクソン人の血統の」エセルスタン王の役割を強調した。アンダーソンは、エセルスタンが「高貴な会所に集まるための証書と、彼の息子で卓越した大会所長である王太子エドウィンが旧き書物から引き出し、ヨークの会所にすぐに集めた兄弟にそのすべてを伝えた良き王令」をメイソンに授けていたのだと打ち明けた¹⁶。ゆえにロンドン大会所の創立者は中世の作業メイソン団の創設者の実践を再開したにすぎないというのである。大会所の創立は危険な革新であるどころか、実際には復古であることになる。

意味深いことに、1738年の第二版は、王の技法の先駆者たちによる作業についての伝説的物語の集成にとどまらない。それは中世全体のみならず、ハノーファー家によるイングランド王位継承までの近世も含んでいた。こうした企ては、思弁メイソン団が17世紀末以前のイングランドには存在しなかったことを認めるならば、ある種の想像的精神を前提とする。つまり、16・17世紀イングランドという最近の争乱の時代に関する実際の知識、政治的争点を熟知している必要がある。というのも、ジョージ2世、ウェールズ公、権力の座にあるホウィグの反感を買わないことが肝要であったからである。ところで、アンダーソンには、想像力、学識、賢慮、そして政治感覚が備わっていた。マリ＝セシ

¹⁵ *Ibid.*, p. 187.

¹⁶ *Ibid.*, p. 53 (1723年版); p. 152 (1738年版).

ル・レヴォジェは、まさに「すべては、アンダーソンの言葉が（中略）よく考えられており、その政治的・宗教的影響が綿密に計算されていたことを示している」と述べている¹⁷。

長老派牧師は、巧妙にもクロムウェルの革命と共和政を手短に飛ばした。アイルランドのフリーメイソン団に関する章に収められた、アイルランド史の血塗られた時代に関する段落もアンダーソンの巧妙さをよく示している。彼は首尾よく王の技法の再建をハノーファー朝の功績としたのである。

フリーメイソン団はジェイムズ1世とチャールズ1世の治世下、内戦の時代までにアイルランドに広まったが、建築はすべて1660年の王政復古までに崩れた。続いて、建築はチャールズ1世¹⁸の治世下、国王ジェイムズ2世の戦争までに、イニゴ・ジョーンズ〔高名な建築師〕の弟子たちによって再建された。しかし、王ウィリアム〔1688-1689年の名誉革命の勝者オラニエ公ウィレム〕が平和をもたらしたのち、技芸と学問は女王アンとジョージ1世の治世下で再興されたのである¹⁹。

アンダーソンは、最も偉大な建築師たちを「王の技法」の命運を司った大会所長の系譜に加えたときにも同様の慎重さを示した。彼は1723年版では有名なクリストファー・レン（1632-1723）について、ページ下部の註で二度短く言及しただけだった。レンは1666年のロンドン大火からの復興に際してセント＝ポール大聖堂の筆頭建築師として活躍したが、この時点ではまだ生きていた。しかし、アンダーソンは1738年の『憲章』第二版では、レンが15年前に死亡していた——長老派牧師によれば、「永遠の東方へと移行した」——ため、レンを真正なフリーメイソンと見なし、さらには大会所長とした。しかし、それはどちらかというとなレンの熱意の欠如を嘆き、王の技法の再興を名誉革命の勝者の功績とするためであった²⁰。ステュアート朝のジェイムズ2世を王座から追放した

¹⁷ Marie-Cécile Révauger, « Franc-maçonnerie et religion en Grande-Bretagne: vers une religion d'État », Charles Porset et Marie-Cécile Révauger (dir.), *Franc-maçonnerie et religions dans l'Europe des Lumières*, Paris, H. Champion, 1998, p. 29.

¹⁸ チャールズ2世の誤記ではないと思われる。

¹⁹ Lamoine, *op. cit.*, p. 176.

1688年から1689年の名誉革命への言及は、きわめて巧妙であった。というのも、ステュアート朝支持者（ジャコバイト）の企てが1746年のカロデンの大敗をもって悲劇のなかで終えるまで、いまだに恐れられていた時期に名誉革命に言及することはハノーファー朝を喜ばせるだけであった。アンダーソンはメイソン団の繁栄を1688・89年に生まれた体制と1714年以降王座についた王家に明確に結びつけたのである。

ここまで確認したように、ロンドン大会所は国家による公的承認の願望を抱いていた。おまけに、こうした願望は18世紀を通じて保持され、内外の政治的・宗教的文脈に応じて強まることさえあった。マリ＝セシル・レヴォジェの表現に従えば、ロンドン大会所は「エスタブリッシュメント」への帰属によって名声と卓越を保障されていた。だが、ロンドン大会所長ボーフォール公は1769年に「法人化証書」を請願しており、これにより作業メイソン団を組織し特権と保護を与えたエセルスタンとエドウィンの伝説的伝統を再開できるはずであった。さらに貴族院から証書が授与されれば、メイソン団は以後、公的法人と認められ、国の財政的支援を享受できるはずであった。ロンドン大会所が〔1775年に〕友愛団の力とその「職人」の力強さをロンドンの都市空間において物質化するために、きわめて費用のかかる巨大な「フリーメイソンズ・ホール」の建設計画に着手した際、こうした保証は無視できるものではなかったのである。他方で、この「法人化」計画への主要な批判がイングランドの諸会所の外国人会員や、ロンドン大会所に公認された大陸の諸会所の役職者から発せられたことは指摘すべきである。彼らは、ロンドン大会所とイングランド君主制を結ぶ絆にあまりに依拠し過ぎた表出には、非好意的な反応しか起こりえないのではないかと懸念を抱いた。ロンドン大会所のオーストリア領低地諸邦（現ベルギー）管区大会所長のガージュ侯は、こうした時宜を得ない行動によって、メイソン団が政治的中立と正統な君主への服従という誓約を忘れた、イングランドの政治的影響の大陸への中継組織であるという誤った印象を大陸の政治権力に与えることをとりわけ残念に思った。アンダーソンはボーフォール公よりも慎重であったため、ウェールズ公が「親方メイソンであり、ある会所の長」だったと論じ、公的支援を示唆することで満足していたのである。

フランス革命期にブリテン諸島の諸大会所は、反革命派によるメイソン陰謀の告発と国家による「秘密結社」の禁止がメイソン団に与えうる脅威をあらためて意識した。まず、スコットランドの大学人ジョン・ロビンソンが編纂し1797年に出版された『ヨーロッパのすべての宗教と政府に対する陰謀の証拠』が生じさせた悪影響を想起すべきである²¹。さらに、メイソン団は体制への忠誠と王家への忠実の証明を繰り返すことによって、批判を鎮める——これは実際には明確ではなかった——と同時に自らを「秘密結社」から区別し、制度化の試みをよりよく具体化できただろう。こうした理由から新式派ロンドン大会所は、革命フランスが英国王に宣戦布告をした数カ月後に、折よく王への請願を公表した。

陛下、我々の団体の基礎には我々が集会の間に宗教や政治に関する議論をしないと記されています。実際、我々の友愛団は、異なる宗教的教義を信じ、異なる政府の体制に属す、さまざまな国民で構成されるため、こうした議論は一方の人々を他方の人々に対立させ、兄弟の間に不和をもたらしうるのはです。しかしながら、我々の考えでは、現在の危機と同じくらい予測不可能な危機によって、こうした規則に対する例外が正当化されます。我々イギリス人の第一の義務は、その他すべての考慮に優越しますので、我々は、1688年の名誉革命によって成立し、王と上院・下院に支えられた政府へのきわめて強い愛着を宣言するために、もはや遅れをとることなく、自らの声を同胞の声に合流させましょう²²。

²¹ John Robison, *Proofs of a Conspiracy against all the religions and governments of Europe, carried on the secret meetings of Freemasons, Illuminati and reading societies, collected from good authorities*, London, T. Cadell & W. Davies, 1797. この主題については、ヨハネス・ログッラ・フォン・ビーバーシュタインの大変興味深い著作を参照できる。Johannes Rogalla Von Bieberstein, *Die These von der Verschwörung 1776-1945, Philosophen, Freimaurer, Juden, Liberale, und Sozialisten als Verschwörer gegen die Sozialordnung*, Bern, Herbert Lang, Frankfurt-am-Main, Peter Lang, 1976.

²² «The following address to His Majesty from the Grand Lodge of the Antient Fraternity of Free and Accepted Masons is said to be the production of a nobleman of high rank in the political world», *The Sentimental and Masonic Magazine*, Dublin, July 1793, p. 44-45, traduit et cité par Révauger, «Franc-maçonnerie et religion en Grande-Bretagne: vers une religion d'État», art. cit., p. 38.

イギリスの事例は、「いつの時代もいかなる地でも」「コスモポリタンで自由」であると表明するメイソン界が俗人界の政治状況に無関心ではいられないことを示している。啓蒙期メイソン団のコスモポリタニズムは、礼儀と良き趣味の王国に暮らす「幸福な少数者」の特権であり、俗人界へのいかなる干渉も拒否することで政治的に中立であったが²³、こうした中立性は、包囲心理と外国人の陰謀の強迫観念が人心を捉えたときに価値をもたなくなる。より悪いと、中立は権力者に主権者と国家に対するメイソンの忠誠について疑念と不信を生じさせる。反メイソン主義者は、政治的中立のメイソンのコスモポリタニズムと、バイエルン光明会や急進的啓蒙の戦闘的普遍主義とを混同する機会を逸することはないからである。団体の生存には、すべての模範的な臣民や市民が支持する義務のある立場に自発的に同調することが求められた——メイソン団の誹謗者の批判的にならないことが肝要であった。換言するならば、それはフランス革命の戦闘的普遍主義を非難すること、その工作員を、グレート・ブリテンにおいてだけではなく、これら偽りの兄弟が入り込んだ諸大会所の陣営においても挫くこと、そして正統権威への忠誠を宣誓することである。フランスのメイソン会所は、同様の理由から革命期と第一帝政期にコスモポリタンの信仰告白を放棄し、一連の諸体制の政治的立場に完全に同調するにいたった。英仏の両事例においてメイソン団は、政治的に維持しえない中立性を放棄することで「中立化され」、俗人界の価値と原則を投入され、最終的に現行の政治体制の命運に結びつけられたのである。

フランスでも同様に、メイソンが自らの団体の公的承認を取得することへの願望は、団体の歴史の最初の数十年間にさかのぼる。ジャコバイトでフランス大会所大弁士のアンドル＝マイケル・ラムジ騎士は、ルイ15世をメイソン団の秘儀に加入させたいという願望を隠さなかった。ラムジがその有名な『演説』の原稿を枢機卿フルリに提出したとき、その目的は明らかに、ルイ15世の宰相がメイソン集会に覚える不安を鎮め、彼に団体の道徳性と公的有用性を納得させることにあった。もしフルリが同意したならば、メイソン団は公的承認への道を進むことになっただろう。王の元家庭教師〔フルリ〕は、まさにこうした理由から同意を与えるのを差し控えたのである。パリの自由主義軍人貴族の会

所「純真」が、アメリカ独立戦争末期にサントの海戦で元帥グラスが敗北したのち、国王に献上するための「フリーメイソン」と名付けられた戦艦の艤装に必要な資金を集めるために、連絡先の会所が正規か非正規かを問わずメイソン界全体に寄付金を呼びかけたときも、目的は同じであった。メイソンたちは、メイソン団の資格でフランスの利益の擁護に配慮する市民・熱心な臣民として、英国海軍に沈められた複数の船舶の喪失に対応しようとしていた。つまり、失われた船舶の交換に資金を提供していた王弟のアルトワ伯とプロヴァンス伯、あるいはブルゴーニュ地方三部会——すなわち、旧体制により承認されていた個人や社団——と同じ資格で対応しようとしたのである。

1782年に尊敬すべき会所「純真」は、「フリーメイソン」と名づけられた、メイソンの船長が指揮する110の大砲を備えた軍艦を全メイソンの名において国王に献上するために、その建造への協力を正規か非正規かを問わずフランスの全メイソンに提案した。会所はこの計画が10万人のメイソンに採択され、1人頭12リーヴルを提供すれば、120万リーヴルの金額を拠出できると期待していた²⁴。

パリ「純真」の会所長ガイ・ダルシによれば、この会所は「現在の状況のなかで、その敬愛と友愛の新たな証を与えることを望んで、フランス大東方会に王国の全メイソンの手から玉座に捧げられる偉大な作品に協力するために合流するよう請願した。会所は、多くの卓越し熱意ある職人たちがその傑作を作らないならば不完全なものになるだろうと考えた。私たちの年代記においてかくも知られている彼らの名は、君主に提出される〔寄付者の〕名簿を飾り、顕彰するために書かれたのである」²⁵。

²⁴ *Discours sur l'origine, les progrès, et les révolutions de la Franc-maçonnerie philosophique, contenant un Plan d'Association & un Projet maçonnique de bienfaisance, pour l'Érection d'un double Monument en l'honneur de Descartes Par le F[rère] Béguillet, Avocat au Parlement, Secrétaire Général de la L[oge] de la Réunion des Etrangers, Philadelphie, 1784, p. 42.* シャルル・ポルセが「フリーメイソン」の艤装に関する新史料を公表したところである。Charles Porset (éd.), *Studia Latomorum & Historica. Mélanges offerts à Daniel Ligou*, Paris, H. Champion, 1998, p. 347-373: « Matériaux inédits relatifs à la loge des Neuf Sœurs ».

²⁵ Bibliothèque nationale de France, Cabinet des manuscrits, fonds maçonnique (以下BNF, Cab. mss, FM と略記), FM² 58 bis, la *Candeur*, orient de Paris, dossier 1, f° 44.

「純真」の計画が一部の兄弟たちを動揺させたのは事実である。彼らは、メイソンが俗人界を引き裂く紛争への関与を拒むという友愛団の基礎にある平和主義に反することなく、兄弟による恒常的な指揮が望まれている「フリーメイソン」の儀装に資金を提供できるかを自問した。例えば、マルセイユの「スコットランド聖ヨハネ」会所にとって、この計画は「地上の全フリーメイソンを、そのさまざまな祖国を区別することなく結びつける平和と友愛の精神に反している」。同会所によれば、「水夫とその妻子を救済するために、そして、すべての真のメイソンが嘆き悲しみ、その終焉を願う、ヨーロッパ、アジア、アメリカに広がる破壊的な災厄の痛ましい犠牲者すべてを救済するために基金を設けるほうがより適切である」²⁶。

このように意見は一致しなかったにもかかわらず、計画の推進者たちは、問題の重要性を強調した。もし国王がメイソンからの献上品を受け取るならば、もし「フリーメイソン」が王国海軍の地位を認められてフランス船旗を掲げるならば、その時、許容されていたフランスのフリーメイソン団全体がその存在と公的有用性を承認されるのを目にするだろうというのである。この計画はフランス大東方会が躊躇したことで最終的に挫折するが、これは、メイソンが自らの団体の公式承認と制度化を獲得することを断念したことをまったく意味しない。1789年と1791年にも「我々の団体は特権を与えられるだろうか」という問題がフランス大東方会に提起されている²⁷。第一帝政期には、フランスのメイソンたちは、新体制の「花崗岩塊」^{〔訳注(2)〕} になるために、自らのコスモポリタンの信仰告白と中立性の放棄を受け入れたのである。パリでは、デンマークの外交官エルンスト＝フリードリヒ・フォン・ヴァルタースドルフが1784年に設立した会所「外国人結集」が〔1810年5月に〕その名を「マリ＝ルイズ」へと変更した。マリ＝ルイズはフランス的ヨーロッパとその主人の命運に良くも悪くも結び付けられ、中立化された外国人女性の象徴であった²⁸。当時、フ

²⁶ Archives privées Jacques Choisey (Bruxelles), *Livre d'architecture de la Respectable Loge Saint-Jean d'Écosse*, planche du 22^e jour du 3^e mois de l'an de la Vraie Lumière 5782.

²⁷ BNF, Cab. mss, FM, FM² 254 I, *Les Amis Réunis*, orient de Lille, dossier correspondance avec le Grand Orient, f^o 148 v^o, 26 août 1791.

²⁸ Pierre-Yves Beaurepaire, «Le cosmopolitisme des Lumières à l'épreuve: la Réunion des Étrangers à l'orient de Paris de la fin de l'Ancien Régime au Premier Empire», *Revue historique*, CCXCX/4, n^o 608, 1999, p. 795-823.

ランス大東方会が自らの権威に敵対的であるコスモポリタンな諸会所に対して、他者への恐怖や外国人の陰謀の強迫観念を道具として用いるのを躊躇わなかったのは事実である。

このようにイングランドと同様にフランスにおいても、メイソン団は公的承認を求めて、言わば潔白さの教育によってメイソン作業の非攻撃性を納得させると同時に、体制への忠誠を絶えず繰り返し表明したことが理解されるのである。

権力の不安を鎮め、フリーメイソン団の公的有用性を納得させる

1740年のチューリヒの週刊誌『デア・ブラフマン』のなかで18世紀のフリーメイソンに関して次のような説明を読むことができる。

フリーメイソンは彼が暮らす場所でその邦の法に従います。我々は正真正銘の友情を育んでおり、信仰の告白が我々の団結を損なうことはありません。というのも、異なる宗教の男女が平和に安全に愛し合えるように、宗教の多様性は危険な影響を及ぼすことなく我々の間に存在しうるからです。我々はコンスタンティノーブルではイスラム教徒がマホメットの教義を認め広めるのを完全に自由にさせています。ローマでは、人々はあらゆる鐘をならしたり、行列をしたり、諸聖人の遺骨をある場所から別の場所へと運んだり、同種の他のことをしたりできます。以上が、メイソンの平和と満足を揺るがすことはありませんし、メイソンが戦うべき何かだとは見なされません。メイソンは彼が暮らす場所で、何よりもまず善良な市民、善良な臣民です。何故なら我々の法すべてが世界において平和、安全、理性、自由、正義を確立することを目的とするからです。もし我々がこの団体に属す誰かが悪事や不正を働いたのを確認したならば、彼はただちに団体から追放され、死者と見なされるでしょう。かつてのピタゴラス主義者においてと同じように、あたかも世界に存在しなかったかのように見なされるのです²⁹。

²⁹ *Der Brachmann*, 1740, t. 42, p. 329.

半世紀近く後、オーストリア領低地諸邦管区大会所長ガージュ侯は、同様の見解を支持した。メイソンは権威に気に入られる模範的市民である義務を有するのである。

メイソンは自らが服従する権力者に疑念や不安を抱かせるつもりはないため、その第一の義務は権力者に気に入られることにあります。（中略）我々は我々の会所を統べる叡智を知る恩恵に浴しています。我々はそこで温和さや礼儀を教えますが、（中略）その会談に国家と宗教に関する事柄が含まれることは一切ありません³⁰。

フランスとイギリスのメイソンは、ロンドン大会所の設立以来、18世紀を通して、こうした態度を最優先してきた。権力が兄弟に対して不公正な態度をとり、友愛団の進展を妨げるときでさえ、メイソンは服従しなければならない。というのも、唯一、権力に対する無条件服従が、そして、彼らの道徳的行動の模範性が、彼らの敵対者を鎮めることになるからである。1785年4月、プロヴァンス地方大会所の長は、アヴィニョンの「完全団結」会所にこのことを認めさせようとしていた。「完全団結」は、教皇領ではメイソン団が公式に禁止されていたにもかかわらず、憚ることなく存在したいと望み、フランス大東方会に公認を要請していたのである。

彼ら〔フランスのメイソン〕は、この崇高な技法の実践がこの都市であまりにも長い間、被ってきた困難や障害を嘆いていました。それらに打ち勝つ最も確実な方法は、人類にとって有用な美徳の実践によって知られることです。我々の秘密主義の秘儀的結社が、疑り深い政府に怪しまれるならば、善行によってそれを正当化すべきです。これこそがメイソンが団体を擁護する行動です。習俗において公正で、善良で誠実でありなさい。兄

³⁰ Extrait d'une planche du marquis de Gages, Grand Maître provincial des Pays-Bas autrichiens, adressée à l'ensemble des ateliers de son ressort. Cité par Bertrand Van Der Schelden, *La Francmaçonnerie belge sous le régime autrichien (1721-1794), Étude historique et critique*, université de Louvain, *Recueil de travaux publiés par les membres des conférences d'histoire et de philologie*, 2^e série, 1^{er} fascicule, Louvain, Librairie universitaire, 1923, p. 158.

弟を愛し、全人類を愛し、不幸な人々を救い、あなた方がつねに良き友、良き親、良き市民、忠実な臣民であると示しなさい。メイソンの名を尊重させながら、あなた方の統治者があなた方に保護を与えるように強いるのです。つまり、保護を与えないことを彼らに恥じ入らせるのです³¹。

もっとも、この会所の弁士は、「無知の狂信に曝されているこの会所が置かれた立場では、その攻撃を弱めるための最も確実な方法は、一般的評価によって尊敬されている市民の名と美德をそれに対立させることである」と十分に自覚していた。メイソンは不正の犠牲者であるときも服従すべきである。それゆえ、彼らは自らの潔白と誠実さを証明するだけである。メイソンは君主の命令が不公正なものであっても、それに服従することが兄弟の名誉であるという考えを完全に内面化していたため、いかなる抵抗も考えられなかった。さらに、正統な社交空間〔社団〕の周縁にあるというメイソン団の状況では、あらゆる不服従は、権力の不安を鎮め、パリやロンドン、ストックホルムでも切望されていた団体の公的承認を獲得するための数十年にもわたる努力を水泡に帰すおそれがあっただろう。

それゆえ、メイソンによるメイソン団の資格での政治的領域への不介入は教義として確立された。唯一、メイソンに認められ、望まれさえした俗人界への干渉は慈善に限定され、団体の有用性を強調するために、ある時には控えめに、ある時には反対に最大限の公開性を与えられた。他方、政治的領域への不介入は今日、自らの正規性を主張するアングロ＝サクソン系の諸大会所とそれらに承認された世界中の統轄組織と、「進歩主義的」な諸統轄組織との間に存在する主要な相違点の一つである。後者は現代のフランス大東方会に倣ってメイソンは——字義通りの——政治的大論争への参加が認められると考えている。

しかしながら、メイソン領域の政治的中立化は、公的承認を期待するために備えるべき唯一の条件ではなかった。会所はエリートを魅惑しなければならないのである——ガージュ侯は、メイソンは「気に入られる」べきだと書いた。会所の内部にエリートが控えめにだが決して秘密裏ではなく存在することは、

³¹ BNF, Cab. mss, FM, FM² 153, dossier la *Parfaite Union*, orient d'Avignon, discours du président de la Grande Loge de Provence, 15 août 1785.

集会とその構成員に〔公的承認の〕資格を与え、「正統文化」の領域へと進入させるのである——正統文化の機関は啓蒙の世紀にはもはや、必ずしも君主から開封王書による承認を受けておらず、サロンや展示協会、その他の読書室の場合、アカデミーと比べると、発言や運営のより大きな自由を特徴としていたが、全体社会と断絶しているわけではなかった。兄弟たちが貴族身分の代表者や君主政の代理人に対して、彼らの地位ゆえに熱心に加入を懇願し、彼らを受け入れたことを示す何十もの証言が文書館には残されている。彼らはメイソンの言説とは裏腹に加入志願者の俗人界での属性に敏感であると認めることで、自らにのしかかる主要な脅威を鎮める機会を得る。その脅威とは、ルネ・ジラルが生贅言説の主要な構成要素であると明らかにした「非差異化」の罪である。ベルザンス猥下〔マルセイユ司教〕の1742年の司教教書や、オルレアン上座裁判所検事の報告書を読むだけで、諸権威——ここではベルザンス——が、友愛団の批判者たちと同様の不安を抱いていたことを理解するには十分である。その不安とは、メイソン共同体が正真正銘の対抗社会を生み出し、そのなかでは、旧体制を支える二つの原理、つまり、身分制社会と、社団や共同体への帰属により定義されるアイデンティティが、「国民的」・社会的・宗教的アイデンティティを考慮も尊重もしない万人への開放に代替されるのではないかというものであった。

ベルザンス猥下は、司教教書において「あらゆる国民、あらゆる宗教、あらゆる身分の人々を区別することなく受容する集会、そして特に、身元不明者や異邦人が誰でも示し合わされた何らかの合図によって、この秘儀的結社の構成員だと知らせるや否や、彼らに対して好意を示す親密な団結」を非難した³²。オルレアンでは上座裁判所検事ルクレール・ド・ドゥイが、大法官ダゲソへの二通の報告書のなかでフリーメイソンに心を痛めている。

〔メイソンが〕さまざまな身分や地位の人々で構成され、兄弟の名でのみ呼び合う相互的兄弟愛の絆で結ばれた団体を形成しています。貴族と平民、将校と職人が不名誉なことに混同され、全員が同じ利益を享受しています。

³² Bibliothèque municipale de Carpentras, mss 891, f° 68-70, mandement épiscopal du 14 janvier 1742.

彼らが唯一互いに考慮する人間という性質が、彼らを本性により平等にし、彼らに地位と生まれ、さらには宗教による区別を忘れさせ、異端、不信仰者、偶像崇拜者と交際するのをためらわせないほどです。(中略) 私は、このことをある外国人メイソンが私に白状したことで知りました³³。

フリーメイソンにとって脅威は現実的であった。メイソンが、自らはきわめて忠実で従順な臣民であり、メイソン団はその構成員の各人の国民的・政治的・宗派的・言語的アイデンティティを尊重していると納得させるのに成功するならば、諸権威の不安を鎮め、脅威を回避することができる。あるいは彼らが説得的な証拠を提示できなければ、権力は反メイソン言説により注意深く耳を貸すかもしれない——反メイソン言説の主要な原動力は、メイソン団が個別的アイデンティティを否認し、他者と同類者を混同することで、政治的・宗教的共同体に与える脅威であった。

私が別の機会に明らかにしたように、大多数のメイソンは「より多数でより賢明な側」が規定した社会的卓越化の規範への完全な順応主義を採用していたし、選拔基準の緩和、反対にその厳格化は、俗人界の社会的状況やエリートの要求に同調しようとする配慮に対応していたのである。選良の友人の共同体の調和を乱し、俗人の目に共同体の信用を失墜させうる絶対的他者性を備えたものは誰でも事実上、さらには権利上、排除されたことは明白である。ユダヤ人、植民地における混血、そして前二者に並ぶほどではないがイスラム教徒は、18世紀フランスの会所に自らの居場所をもたなかった³⁴。身体的他者性はしばしば兄弟としての承認と相容れなかったようである。複数の会所が存在した都市の内部では、メイソンたちは俗人界の友情を秘儀伝授者の友愛に変容させることで活性化させようとしたが、秘儀伝授志願者の分布が俗人界での友情のみにもとづいていたわけではないのは明らかである。レッシングが彼の『フリーメ

³³ オルレアン事件については、以下を参照。José A. Ferrer-Benimeli, *Les archives secrètes du Vatican et de la Franc-maçonnerie, Histoire d'une condamnation pontificale*, préface de Michel Riquet s. j., traduit de l'espagnol par G. Brossard, Paris, Dervy, 1989, p. 383-387.

³⁴ Pierre-Yves Beaurepaire, «Fraternité universelle et pratiques discriminatoires dans la Franc-maçonnerie des Lumières», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 44-2, avril-juin 1997, p. 195-212. これは予備的調査であり、深化・修正されるべきであろう。

イソンのための対話』ですでに論じたように、加入志願者は、会所の構成員による質問と加入儀礼の試練に先立って、兄弟として受け入れられるに値する同輩として認められていたのである³⁵。そもそもメイソンは、こうした社会的卓越の追求を非常に巧妙に引き受けていた。カレの「結集友人聖ルイ」会所は「カレの最も卓越した人物」で構成されていると誇らしげに表明した³⁶。そして、その会所長は、会員の社会的構成では劣る同都市の新会所「完全団結」に対して次のように教えるのを怠らなかった。「秘儀伝授者として推薦される人々の選択に際しては最大限の配慮をすべきである。習俗の不道德性や身分の卑しさが排除の正当な理由となるような人々をつねに拒否しなければならない」と³⁷。それでもやはり、「結集友人聖ルイ」会所の書記は新会所の設立式の際に、メイソンの卓越化は厳密にメイソンの規範にもとづいていると強調する。

我が兄弟たちよ、かくも頻繁に侮辱された人類にとって、私たちの眼前に広がる光景よりも慰めとなるものはありません。生まれ、地位、財産は、美德と平等の住処であるこの壮大な会堂ではいかなる力ももちません。人々は、ここで自然の秩序のなかに入り、最も地位の高い者は、運命が彼らの下位においた者たちを軽蔑するどころか、反対に彼らを兄弟と認め、真の情愛を素早く示そうとするのです。我が兄弟たちよ、これこそが我々の神聖なる団体の原理がもつ幸福な効果です³⁸。

バイヨンヌでは、自らの会所にユダヤ人が属することに反対するメイソンたちが、その理由を率直に述べている。

³⁵ 「エルンスト：君が私にフリーメイソン団の基礎として示した平等、この平等は私の魂をあまりにも思いがけない希望で満たしていた。市民社会の修正以上のことを考えられる人々の団体のなかでならば、第三者に不利となるかもしれない平等を放棄せず、ようやく平等を望めるのではないかと。」（Gotthold Ephraïm Lessing, *Dialogue pour des francs-maçons, Premier dialogue*, éd. franç. 1992, Le Mans, Le Borrego, p. 55）。

³⁶ BNF, Cab. mss, FM, FM² 192, dossier *Saint-Louis des Amis Réunis*, orient de Calais, f^o 17 r^o, 19 septembre 1784.

³⁷ BNF, Cab. mss, FM, FM² 191, dossier *La Parfaite Union*, orient de Calais, f^o 3 v^o.

³⁸ Ibid., f^o 14 v^o.

このように「ユダヤ人が」加入したことで、俗人およびメイソンとしての地位によって尊敬すべき数多くの兄弟が編入のために訪れるのを妨げられています。我々は皆、人間は人間と平等だと知っています。そして、真のメイソンの最も美しい徳の一つは、この真実を想起させることであるのも知っています。しかし、私たちは、もし結社に楽しみを見出したいならば、温和さ、誠実さ、礼儀が結社の基礎を形成すべきであることも分かっているのです。

彼らは自らの目的を果たしたのち、満足して次のように結論した：「私たちの団結と繁栄に反対する構成員は、もはや私たちを妨げることはありません。私たちはようやく正真正銘友人の集会であるという貴重な善を味わえたのです」³⁹。

イングランドでもフランスでも、ジョセフ・ド・メーストルのいたサヴォイアでも、あるいはフレデリック＝ロドルフ・ザルツマン〔アルザス出身の書籍商・出版業者・作家・メイソン、1749-1821〕が家庭教師であったドイツでも、ステイーヴン・C・バロック〔ウースター工科大学歴史学教授〕が見事にその証明をしたアメリカ合衆国でも、会所が加入志願者の俗人界での属性に敏感であったので、宇宙の偉大なる建築師の聖域〔会所〕において社会的地位の違いを超えて確立された平等的関係——アイデンティティではない——は、集会の間、会堂に集められた友愛共同体の内部でのみ意味をもつと兄弟たちが力説していたことを強調すべきである。メイソンは会堂の外部では市民権をもたなかった。これはもちろん秘儀伝授によって結ばれた絆が切れたことを意味しないが、各領域にはその作法・規範・基準が存在することを意味している。メイソン領域の垣根は秩序と調和のために設けられたのに、俗人領域とメイソン領域の混同は混沌の原因となるのである。ウィリアム・プレストン〔スコットランド出身の出版業者・作家・メイソン、1742-1818〕は、1794年8月の『フリーメイソンズ・マガジン』において次のように断言している。

メイソン間の平等は、団体の偉大な原理である友愛を促進するために、会

³⁹ BNF, Cab. mss, FM, FM² 159 bis, dossier de l'Amitié, orient de Bayonne, f° 11 v°, 12 juillet 1783.

所の集会の間に上位者が下位者に対して示す一時的で自発的な心遣いの証である。しかしながら、彼らが会所を去るとき、各人はただちにその地位と立場を取り戻し、名誉はその権利をもつものに与えられる。

一方、ザルツマンは、のちにプロイセンの宰相となるカール・フォン・シュタインの母親に対して次のように書いた：「フリーメイソンであると自称するものすべてが我々の兄弟であるとはなりません。ゲッティンゲンの自称メイソンの数は200名近くになりますが、我々がかりうじてそう認めるのは20か30です」⁴⁰。こうした表明が必要であったのは、反メイソン主義者たちが、一部のメイソンの平等の称賛を社会的地位の再検討と身分制社会の解体を扇動するものだとして曲解しうるからである。

それゆえ、18世紀のメイソンは、メイソン団の資格での政治参加の拒否と社会的体制順応主義をまさに潔白さの教育に組み込むことで、批判を予防・無力化しようとしたのである。自然状態での社交欲求、仲間内で会う願望が引き合いに出されたのは理由のないことではない。ジョセフ・ド・メーストルは、会所は「政府が全く恐れる必要のない、純粋に娯楽結社であった」と強調した⁴¹。実際に兄弟たちは、彼らの同時代人の大半か、いずれにせよ世論に重きをなす人々、「より多数でより賢明な側」を説得できたように思われる。グレゴワール神父が、一部のメイソン団批判者が非難する「無宗教、放蕩、暴動の罪」を最小限しか信用せず、反対にメイソン団は「娯楽の趣味に少しの善行を結びつけた結社」でしかないと評価するとき、彼は世論を繰り返しているのである⁴²。旧パリ・ポリス総代官ジャン＝シャルル＝ピエール・ルノワールの『回顧録』が物語るように、諸権威もまたフリーメイソンについて安心していた。

⁴⁰ Jules Keller, *Le théosophe alsacien Frédéric-Rodolphe Saltzmann et les milieux spirituels de son temps. Contribution à l'étude de l'illuminisme et du mysticisme à la fin du XVIII^e siècle et au début du XIX^e siècle*, thèse de doctorat d'État sous la direction de Gonthier-Louis Fink, Université des Sciences humaines de Strasbourg, UFR des langues, littératures et civilisations étrangères, 1984, t. 1, p. 150.

⁴¹ Joseph de Maistre, « Mémoire sur la Franc-maçonnerie adressé au baron Vignet des Étoles », *Œuvres II, Écrits maçonniques de Joseph de Maistre et de quelques-uns de ses amis francs-maçons*, éd. critique par Jean Rabotton, Genève, Slatkine, 1983, p. 125.

⁴² Abbé Grégoire, *Histoire des sectes religieuses*, Paris, 1810, t. I, p. 403.

1785年にはまたメイソン会所は無害な気晴らしか、むしろ神秘性の象徴を有する子供じみた組織の残滓としか見なされていなかった。25年以上、特筆すべき騒動は全く生じていなかった。これらの会所がヨーロッパに存在して数世紀が経過していたが、パリでは政府が50年前にそこに発見したと信じたような危険性をもはや示していなかった。有名な会所の会所長や弁士らは、会所で宗教や国家に反することは話していなかった。1785年にはまた、これこれの会所が何日に開かれるとか、ダンスと音楽、食事、それに続いて囚人のための募金が行われるとか知らせるためにパリとその周辺のさまざまな会所から派遣された代表を私は受け入れていた。人々はフリーメイソンと光明会と陰謀家の危険なセクトがフランスの幾つかの地方と諸外国に入り込んでいると主張していた。この点について私が1784年〔ヴェルテンベルクでメイソン団が禁止され、バイエルンで光明会が追放された年〕に受け取った匿名の意見は、政府が考慮する価値がないように思われていた⁴³。

とはいうものの、メイソンの体制順応主義、つまり、彼らが模範的臣民、非攻撃的な友愛団の構成員たらしめる意思は、黙認されているが未承認であるという団体の脆弱性に余儀なくされたものだろうか、それとも自発的に合意された選択だったのだろうか。提起されるべき問題である。まず、パリの威信ある会所「結集友人」の集会記録簿の抜粋が示すように、兄弟たちが彼らの誹謗者に手がかりを与えることを意識的に回避しようとしていたのは明らかである。

各人が信じる宗教を少なくとも外面的には尊重すること、宗教を揶揄するような冗談を自らに禁じること、この問題に関しては、醜聞を招いたり安寧を乱したりする疑いのない、信頼できる人物としか議論をしないこと、最後に、良心が認めることのできる範囲で、ほかの人々の輦轡を買わないために義務を果たすことを約束すること〔を兄弟に命じた〕⁴⁴。

⁴³ Bibliothèque municipale d'Orléans, mss 1422, *Mémoires de Jean-Charles-Pierre Le Noir*, 1^{re} partie, titre 6, Sûreté, p. 103.

⁴⁴ Archives nationales, 177 AP 1, papiers Taillepied de Bondy, *Livre d'or des Amis Réunis commencé le 16 février 1777*, 31 janvier 1785, f° 1-3.

さらに、フランスでは1730・40年代にメイソン団がボリスと裁判所の嫌がらせの犠牲者であったとき、その構成員は集会をやめることはなかったものの、しばしば賢明にも過度に公然と表出するのをやめた。開封王書により承認されていない社交組織の活動は慎重さと妥協を必要としたのである。とはいえ、メイソンが旧体制社会の規範に完全に同化していたのは明白である。彼らは身分をもつ人々であり、「より多数でより賢明な側」の構成員として認められようとする、身分制社会の一員であった。そもそも諸権威は、こうした忠誠の表明が誠実さを欠いていたならば、長い間、欺かれることはなかっただろう。

総裁政府期、あるいは復古王政期にメイソンが復興したときにも、フランスのメイソン会所は同じ態度をとった。諸会所は忠誠を競い、諸権威に数多くの忠実の証を発した。例えば、1792年のダンケルクで、この都市で最も権勢ある会所「友情と友愛」が印章を黒塗りにしたのは、その中心を三本白百合〔王家の象徴〕が占めていたからである⁴⁵。この会所は1799年には、もとの形を保持しつつも、白百合の花をリクトルのファスケス^{〔訳注(3)〕}で置き換え⁴⁶、続いて1804年に冠を頂く二列の星へと変更した⁴⁷。この会所は同時に祝祭を世俗化させた。二人の聖ヨハネの祝祭が夏至と冬至のそれへと変更され、単一不可分の共和国と法の保護に言及しながら共和歴が導入された。会所が正式に活動を再開した1797年9月10日以降、会所長は彼の兄弟たちに共和国への忠誠を宣誓させている。

単一不可分のフランス共和国5年、フリュクティドール24日、9月10日、
[中略] すべての兄弟が整列すると、会所長は祖国への愛、フランス共和国への愛着、法の尊重、憲法上の諸機関への服従、私たちの教説の基礎であり、真なるメイソンすべてが弛まず実践すべき美德に関する演説を行った。この演説は共和国の栄光と繁栄のみを常に熱望するすべての兄弟たちに生き生きと感じられ、拍手喝采を受けた。[中略] 会所長はこの重要な事柄に求められる礼節と形式をもって全員にフランス共和国への忠誠を誓約させた。すべての兄弟は感情をあらわにしながら、祖国愛、共和国への偽りなく変わる事のない愛着、そして、フランス市民の義務を最大限正確に果

⁴⁵ BNF, Cab. mss, FM, FM² 228 I, *Amitié et Fraternité*, orient de Dunkerque, dossier 1, f° 78 r°.

⁴⁶ *Ibid.*, dossier 2, f° 1, 20 septembre 1800.

⁴⁷ *Ibid.*, dossier 2, f° 8 r°, 11 janvier 1805.

たすことを誓った⁴⁸。

「友情と友愛」の元会所長でスウェーデン領事、国民衛兵の連隊長、立法議会議員、ダンケルク市長を務めたエムリは、モンターニュ派の過激化に反対する革命ブルジョワジーを体現している。彼は恐怖政治の被害者であったが、国民衛兵の司令官に復帰し1795年7月20日の民衆暴動を鎮圧した。彼はボナパルトに示した忠誠によって共和歴10年テルミドール25日に市長になり、1806年に立法院に入った。1800年6月30日に弁士に選ばれると、彼の演説は総裁政府期のメイソン団の範を示した。すなわち、地元の名望家は、温かく快適な社交の庵で不躰な視線から逃れながらも、再建された秩序と正統権威の尊重による平穩さのなかでエリートへの帰属を承認されていると確信しながら、同輩と再会できるのである。

フリーメイソン団は長い眠りから目覚めました。友情の甘美な発露と、我々の団体を特徴づける善行と救護の美德に専心するために、真の平等の魅力を味わいにきた、ここに並ぶ兄弟を集めるのには勇気が必要でした。この者たちは、鉄の錫杖をもち恐怖政治により統治していた者に不安を生じさせていたけれど、今後は我々の偉大な運命を司る者の完全な保護により安心させられなければなりません。彼らは公的諸関係においては平靜にしつつも、個別的諸関係においては我々の幸福を保証させるのです⁴⁹。

復古王政のもとでメイソンは、過去に諸権威の不安を鎮め、新権力に対する彼らの忠誠を納得させることができた確実な方法に再び頼った。ナントの「マルスと技芸」会所が1815年12月3日以降、ルイ18世の胸像を披露したのに対して、ノール県のアヴェヌ＝シュル＝エルプでは、ある兄弟が「愛敬」会所にルイ18世の栄光とその憲章を称える版画の予約購入を求めた。

⁴⁸ Archives municipales de Dunkerque, archives de Maurice Bacquart, «Le “Réveil” de la loge».

⁴⁹ Ibid., copie du livre d'architecture d'*Amitié et Fraternité*, discours du frère Emmerly, 30 juin 1800.

いとも親愛なる我が兄弟たちよ、

1814年憲章はフランスが最良の君主に負う最も高尚な恩恵の一つであるため、私は臣民の父〔ルイ18世〕が憲章の賢明なる立法者であられた荘厳な式典を版画に描く仕事を自らに課しました。記憶すべき出来事を社会の全階級の眼前に再現することは多くの場合できないでしょうから、フランス人の正統な主権者に対する愛は無限であるべきであり、君主の臣民に対する善良さは筆舌に尽くしがたいことを公にも家族の内でも、絶えず想起させる必要があります。

私はこの国民的主題の版画の原版をあなた方の尊敬すべき会所に送ることを自らの義務としました。この原版によって、いとも親愛なる我が兄弟たちよ、特にあなた方のような、賢明にも穏健な代表政府の利点を評価できる人々は最大限に関心をかき立てられるでしょう。

この版画図案の構想は、陛下が臣民の幸福に対する絶え間ないご配慮を称える心情を吐露するものでしかありません。私が思いついた企画は、普遍的であるはずのこの感情を表明し、芸術作品によって後世に生き生きと語れることを目的としています。この作品の公表は善行にも貢献します〔中略〕

王は国家の基本法を私たちの子孫に無傷のまま保存する決意を揺るぎなく維持されながら、公共の祝福と承認への恒久的権利を再び獲得されました。真の光明により啓蒙された我々は、我々の幸福のために生き、そう生きようと欲される君主に、心と精神と力によってより緊密に結びつくことになるでしょう。多くの叡智と恩恵が永久に我々の喝采を引き起こし、三回の万歳が私たちの満場一致の喜びを表明するでしょう⁵⁰。

こうした兄弟たちは皆、1815年に出版された『日和見主義者事典』*Dictionnaire des Girouettes* に登場するに値すると考えるべきだろうか。歴史家の役割はこのような価値判断をおこなうことではない。それどころか、兄弟たちが一連の正統権威への忠誠の宣誓をその始まりから定めている結社にそういうものとして属していると力説していたことを指摘すべきである。それゆえに私たちは兄弟

⁵⁰ BNF, Cab. mss, FM, FM² 151, dossier *Aménité*, orient d'Avesnes, f° 148-49 planche imprimée, 22 janvier 1817.

たちが特段の感傷をもたずに、旧体制、革命、総裁政府、第一帝政を通り抜け、復古王政に到達するのを目にするのである。こうした観点から、個人的な政治参加と政治対立が会堂内では市民権をもたないという意味において、フリーメイソン団は中立結社であると考えられる。まさにこの中立性によって、兄弟たちは混乱の時期ののちに、多様な、さらには敵対する政治的選択のあとに、調和が枢要徳として確立された静かなサークルにおいて再び出会うことができたのである。こうした選ばれし友人の共同体から過激主義者だけは追放されたが、そこでは友人たちの個人的選択は、本質的に別の性質をもつ秘儀伝授の力により否定されることなく超越されるのである。こうした事例はフランス革命の後にも見られた。

モンスの「和合」会所がメイソン会所に引き受けられた和平機能を示している。というのも、1800年に選ばれた役職者の大半は旧体制下にモンスの会所に所属して活動していたが、その筆頭の地位には会所長テオドル＝アントワヌがいたのである。彼はかつてエノーの最高評議会の評定官であり、1794年から1795年に亡命したのちに弁護士となった。「和合」の第二監督のジャン＝バティスト・フォンゾンは、1794年にフランスが第二次侵攻をしたときにモンス市長に任命された。「和合」の書記シャルル・フォンセは、熱心なジャコバンとして知られていた。彼は1792年に自由と平等の友の会の会長を務め、ジュマップ県のフランスへの併合の熱烈な支持者であり、県会議員であったが、革命歴6年の五百人会〔革命歴3年憲法で定められた下院〕の議員に指名された。もう一人の会員ジャン＝バティスト・イポリト・ロジエは会所の役職には就かなかったが、刑事裁判所の政府委員で、モリス・アルヌによれば、筋金入りのジャコバンであったが⁵¹、ボナパルトを支持した。というのも県の筆頭市民の一人がレジオン・ドヌール勲章を授与されることになったからである。それゆえに第一監督の兄弟セヴェラン・ラミーヌは彼ら共通の計画を次のように詳述した。

このように集まった兄弟たちの間には、知られている諸革命のなかで最も幸福な革命に関する様々な意見がブリュメール18日まで存在していたが、

⁵¹ Maurice A. Arnould, « La reprise d'activité maçonnique à Mons et dans le département de Jemappes sous le Consulat et l'Empire », *Mélanges offerts à Christine Piérard, Annales du Cercle archéologique de Mons*, t. 74, 1990, p. 13.

彼らはその最も軽微な差異を消滅させることを欲し、「和合」という名で新会所を発足することに合意した⁵²

しかし、対立を孕んでいる状況において、俗人界を引き裂く緊張を締め出した政治的・宗教的平和の庵がもたらす利益を理解するためには、1717年のロンドン大会所の起源にまで立ち戻る必要がある。1723年の『フリーメイソン憲章』が作成されたときにロンドン大会所を支配していた階層は、王立協会と広教主義者とに密接に結びついていた。広教主義者はジェイムズ2世とカトリック絶対王政の支持者との闘いに参加した非国教徒への寛容に好意的であった。ジェイムズ・アンダーソンは、スコットランドの公定教会、権勢ある長老派に属していたが、国教会が公定教会であるイングランドでは非国教徒であったことを思い出す必要がある。メイソン会所は、無神論者、反三位一体論者（異端である）、自由思想家——理神論者という意味である——、そして当然カトリックを排除することで、非国教徒を社交生活に参加させ、「それがなければ永遠に離れたままであっただろう」人々が会合することを可能にしたのである。

それゆえ、友愛団がこうしたメイソン領域を中立化するという早期からの持続的な選択によって、俗人界の状況の運不運を生き抜いたことは明らかである。しかし、こうした選択はメイソン領域の痛ましい否認、さらには「冒涇」の原因でもあった。そのうえ、それは急進的啓蒙主義者とその19世紀の継承者にメイソンの社交への評価を下げさせることになった。ニコラ・ド・ボヌヴィルと光明会からカルボナリまで彼らは、反啓蒙の代表者たち（イエズス会、黄金薔薇十字団…）と彼ら自身との間で会所の統制権の掌握をめぐる競争が始まっていると確信しながら、政治に公然と参加する約束をメイソン団から取りつけるのを断念し、メイソンのネットワークに侵入することしか期待しなかった。おまけにボヌヴィルは、メイソンに政治参加を促し彼らの陣営を選ばせるために、メイソンをイエズス会の陰謀や急進的啓蒙主義に巻き込むのを躊躇しなかった⁵³。そのうえ、フランス革命の勃発以降、大半のメイソン会所を襲った衰退の病は、会所が成熟しつつある公論の政治に参入するのに適した社交の土台ではなかつ

⁵² BNF, Cab. mss, FM, FM² 556, dossier de la *Concorde*, orient de Mons, f° 14.

⁵³ Beaurepaire, *L'Autre et le Frère...*, op. cit., p. 651-667.

たことをよく表している。ある兄弟が「メイソン団はもはや目的をもたない」と宣言したカレから、1792年に「ミネルヴァの信徒」会所の元会所長が大東方会に「我々はメイソン団よりも緊急で重要な関心事がある」と書いたトゥロンまで⁵⁴、状況は同じであった⁵⁵。

反対に、メイソン組織の基礎単位である会所の運営様式——役職者の選挙、毎年の会計報告、構成員の投票による集会記録簿の承認など——、中央の統轄団体とのしばしば対立的な関係、一部の会所による団結の鎖の中心〔統轄団体〕に対する最大限の自律性の追求から、会所が特権的な文化変容、文化横領の場となったのは明白である。会所において兄弟たちは、啓蒙の言説を耳にし、社会的緊張の原因を減らすことを目的とした、同胞との新しい関係様式を練り上げた。会所は、社交と他者の尊重に適した礼儀と洗練のモデルを意識的もしくは無意識的に試す実験室のように機能した。それゆえ、人々は会所において俗人界を苦しめる諸悪を意識・認識し、それらがメイソン領域に侵入するのを予防できるようになる。しかし、ラン・アレヴィがそう望んだように、メイソンの小社会に民主的社交の原型を、会所を統御する規則に旧体制社会の告発を見出すべきであろうか。それは、〔会所という〕社交モデルの多義性を捨象することになるだろう。その成功は、一方では、互いに選抜・承認しあう同輩を結びつける絆の力を特徴とする伝統的な社交形態（改悛苦行兄弟団、騎士団的性格をもつ弓・大弓・小銃の射的会〔十七世紀フランスの各地に出現した都市民兵の懇親を目的とする団体〕など）と、他方では、個人が何らかの集合的アイデンティティに「同化させる」ことなく自己アイデンティティを構築し、固有の道程を決定できる新しい社交形態と間の移行を巧みにやりくりしたことに由来したのである。ダニエル・ゴードンが明らかにした社交領域における「主権のない市民」の出現は、ラン・アレヴィが提示した明確過ぎる構図よりも、メイソン現象と旧体制の社会と文化の領域におけるその軌道によく合致している⁵⁶。

⁵⁴ Cité par Agulhon, *Pénitents et francs-maçons...*, op. cit., p. 187.

⁵⁵ このことは革命期の10年間にメイソン活動が不在であったことを意味しない。この点については、次の論文を参照。Pierre-Yves Beaurepaire, «Le réveil des structures maçonniques locales sous le Directoire et au début du Consulat», Jacques Bernet, Jean-Pierre Jessenne et Hervé Leuwers (éd.), *Du Directoire au Consulat, 1. Le lien politique et social local sous le Directoire et au début du Consulat*, Lille, Centre de Recherche sur l'Histoire de l'Europe du Nord-Ouest, 1999, p. 97-110.

メイソンは、政治的中立化と諸権威への忠誠の定期的表出と引き換えに模範的臣民の資格を主張すると同時に、俗人界の枠組みの外部で——それと対立せず——フリーメイソン世界共和国市民という集合的・個人的アイデンティティを構築できた。このアイデンティティは19世紀に終焉を迎えることになる。なぜなら上流階層の体制順応主義的コスモポリタニズムは、啓蒙の世紀にはエリートの目にメイソン団の長所と映っていたが、以後、戦闘的普遍主義の支持者の目には短所と映ようになり、メイソン団に対して諸権威の嫌疑を生じさせることになるからである。

訳注

- (1) 「より多数でより賢明な側」*maior et sanior pars* は、第3回ラテラノ公会議（1179年）決議第16条「聖職者の選出について」に由来する表現である。聖職者の選出は単に得票が多数であるだけで決定されたわけではなく、知的・道徳的権威をもつ「賢明な側」の支持も必要であるとされた。訳者あとがきも合わせて参照されたい。
- (2) 「花崗岩塊」*masse de granite* は、1802年5月8日国務参事院でのナポレオンの発言に登場する表現で、彼が創出した諸制度や体制を支える政治的エリートを指す。
- (3) ファスケスは、古代ローマの役人リクトルがもつ斧の柄に棒を束ねたもの。フランス革命期に正義を示すシンボルとして用いられた。

⁵⁶ ただしダニエル・ゴードンの著作にはフリーメイソンは登場しない。

訳者あとがき

田瀬 望

本稿は、Pierre-Yves Beaupaire, « De l'opportunité d'être politiquement et socialement corrects. Les francs-maçons, l'État et la société d'ordres à la fin de l'Ancien Régime » dans Luis-P. Martin (dir.), *Les francs-maçons dans la cité: les cultures politiques de la franc-maçonnerie en Europe. XIX^e-XX^e siècle*, Rennes, PUR, 2000, p. 15-38 の翻訳である。原著は OpenEdition Books 上で公開されているので、ご関心の向きは合わせて参照して頂きたい。

著者のコートダジュール大学近世史教授ピエール＝イヴ・ボルペールについては、来日講演録『啓蒙の世紀』のフリーメイソン』（深沢克己編訳、山川出版社）が2009年に刊行されており、啓蒙期ヨーロッパ社会文化史・フリーメイソン史研究の泰斗であることは知られているだろう¹。今回訳出した論文は、十八世紀にブリテン諸島からヨーロッパ全域に広まったフリーメイソン団が旧体制期フランスの国家や社会といかなる関係を有していたのかを明快に描き出しており、近世国家の団体的編成の持続・動揺・変容を結社史の観点から考察するうえでも示唆に富む内容となっている。十八世紀フランスのフリーメイソン団は自主的な規則や憲章の制定、議論や投票による意思決定、選挙による役職者の選出といった平等主義的な運営方式から政治的近代性や民主的性格を備えていると見なされ、絶対主義国家や身分制社会との緊張関係が強調されることが少なくない。だが、本稿で説得的に論じられているように、メイソン団は社団として未承認の不安定な地位にあり、俗人界の秩序原理と断絶・対立する編成原理を掲げていたがゆえに、旧体制のなかで存在を確保し、反メイソン言説を鎮め、公的承認を獲得するために「エスタブリッシュメント」に順応し正統文化を尊重していたのである。第三ラテラノ公会議に由来する「より多数でよ

¹ 訳者は過去にボルペールの論文を2点共訳しているので合わせて参照されたい。「社交性の『製作所』」『クリオ』30号、2016年、65-80頁；「啓蒙の世紀のフリーメイソン会所におけるムスリムの認識と受容」『クリオ』31号、2017年、107-122頁。2019年には原書房から『マリー・アントワネットは何を食べていたのか』（吉村ダコスタ花子訳、原著 Marie-Antoinette : biographie gourmande, Paris, Payot, 2016）も出版された。

り賢明な側」という表現が本論で繰り返し用いられていることも著者の見方をよく示しているだろう。

とはいえ本論が出版されてから約20年が経過しており、この間、「ロシア文書」(Archives russes)と呼ばれるメイソン文書群の公開を契機として史料状況が大きく改善し、その分析に立脚した研究が進展している点は補足しておきたい²。この新史料はヴィシー政府期にドイツに収奪され、第二次世界大戦後、モスクワの国家中央特別文書館に保存されていた膨大な数のメイソン文書群であり、2000年にフランスに返還された。その後、フランス大東方会(Grand Orient de France)を始めとするメイソン統轄団体の図書館でメイソンか俗人かを問わず研究者に公開され、豊かな成果を生み出し始めている³。こうした動きと並行してメイソン団体と大学の研究者との間で交流や協力も進展している。その一例として、2016年にフランス国立図書館で開催された「フリーメイソン団」展が挙げられる⁴。この企画展の学術委員会には展示品を貸し出すメイソン団体に所属する研究者だけではなく、十八世紀研究の大家ダニエル・ロッシュを筆頭にボルベールはもちろん、エリック・ソニエといった近年の研究を牽引する歴史家が名を連ねており、展示では最新の学術的成果にもとづくメイソン団の歴史が市民に提示されたのである。この企画展に際してフランス大東方会内部のメイソン研究所(Institut d'études et de recherches maçonniques)が大学に属する研究者を主体とする学術委員会を発足し、以降、2年ごとにフリーメイソンを主題とする人文学・社会科学の修士論文や博士論文に学術賞を授与したり、研究集会を定期的に組織するようになったことも注目に値する⁵。

² 本稿の冒頭ではかなり批判的であった著者のメイソン研究の現状認識にもその後、変化が見られる。例えば、以下を参照。Pierre-Yves Beaurepaire, Kenneth Loïselle, Jean-Marie Mercier et Thierry Zarcone (éd.), *Diffusions et circulations des pratiques maçonniques XVIII^e-XX^e siècle*, Paris, Garnier, 2012, p. 7-20 : « Quel avenir pour les Masonic Studies ? ».

³ 注(2)で挙げた文献に加えて、例えば、次の論文集に寄稿している研究者の業績が重要である。Thierry Zarcone (dir.), *La fabrique de la franc-maçonnerie française. Histoire, sociabilité et rituels, 1725-1750*, Paris, Dervy, 2017.

⁴ この企画展の特設サイト上で展示品の一部とその解説を閲覧することが可能である。<http://expositions.bnf.fr/franc-maconnerie/index.htm> (2022年1月12日アクセス)

⁵ 例えば、植民地におけるフリーメイソン団を主題とした国際研究集会の論文集を参照。Éric Saunier (dir.), *La Franc-maçonnerie dans les colonies (XVIII^e-XX^e siècle) : De l'Atlantique à la mer de Chine*, Paris, Maisonneuve & Larose / Hémisphères, 2022.

訳者自身も留学中にこうした史料公開の恩恵を受けて博士論文を執筆したが、今回の訳出を通して日本の研究者や学生、市民の間で学術的なフリーメイソン研究とその成果に対する関心が高まることを切に願っている。最後に翻訳を快諾してくださったボルペール先生、訳文に丁寧に目を通してコメントを寄せてくださった大貫俊夫先生と見瀬悠氏、掲載を快諾してくださった東京都立大学人文学報の編集委員の方々に厚く御礼を申し上げる。